哲學研究　第三百五十七號

寸心先生日記抄（五）

四四

○明治三十八年

一月一日　洗心庵に於て卅八年の春を迎へた。毎年除夜にはよく眠れなかつたが、昨夜はよくねた。去年は余の一身にとりては實に不幸の年であつたが、今年はどうか幸福でありたいものだ。

雪門老師昨夜歸庵、午前は和尚と話して過した。

午後打坐、藤岡生來た。

夜打坐。

松樹山占領の號外出たと晩に和尚が話された。

今日は怠つた。和尚にもらつた二杯の年始の酒に醉つて、ねてしまつた。

法燈國師が鶯に題する投機の偈「心卽是佛、佛卽是心、心佛如々、亙古亙今」

〔發信欄に〕三竹君へ老師歸庵を報じた。家へもはがきを出した。

一月二日　朝六時頃に起き出て、曉風に吹かれながら、山上より見下した。弦月中天にきらめき、全市は雪を被りて、尙薄暗の中に閉されて居た。

藤岡生、石川君、島野君がきた。

午後三時半頃旅順口陷落、ステスセル降服の號外至る。愉快不自禁。北國男子忠勇の功也。全市鐘鼓を鳴らして之を祝す。

夜は少しく骨折つた。

一月三日　六時頃起き山に出て見たが、まだ眞黑で少しく雨がふりて居た。新聞がきた。昨日午後四時半水師營に於て、兩軍々使の談判が結了したといふ。

午前打坐。

午後打坐。

夜打坐。

大燈國師の歌「耳に見て眼にきくならば疑はじをのづからなる玉川の水」

一月四日　今朝の新聞號外で、旅順開城規約文をよんだ。

午前打坐。

正午砲をうつや否や、縣下一般鳴物を鳴らして、旅順陥落を祝す。（縣下鳴）

午後打坐。

夜打坐。獨參。自己の無氣力なるを思ふて、憤怒不自禁。

一月五日　午前打坐。昨夜來余の心甚惑ふ。余は自己を知らず、徒に大望を抱けり。併し今は余が擇びし途を猛進するの外なし。退くには余はあまり老ひたり。

午後打坐。正午公園にて旅順陥落祝賀會あり、萬歲の聲聞ゆ。

今夜は祝賀の提燈行列をなすといふが、幾多の犧牲と、前途の遼遠なるを思はず、かゝる馬鹿騒なすとは、人心は浮薄なる者なり。

夜打坐。雨中にも關せず、外は賑し。

四十二章經曰、夫爲道者猶木在水尋流而行、不觸兩岸、不爲人取、不爲鬼神所遮、不爲洄流所住、亦不腐敗、吾保此人、決定入海

一月六日　早起打坐、夜なか〳〵あけず。

朝食後洗心庵を辭して歸宅。年賀端書三十餘枚をかく。たまり居たる讀賣新聞をよむ。ホトヽギス、新小說もあり。

懇次郎遺族本日余の宅に引移る。余は渠が一心に思ひ居りし遺孤を見て、獨り涙を呑む。

ホトヽギスには爲山が Boris de Tagieff といふロシヤの捕虜の寫生（旅順にて捕はれ文學者であるといふ評判の男）と不折がローダンと佛（いふ？）の大彫刻家を訪ふた話があつた。

新小說では、藤村の津輕海峽といふのをよんだが、あまり面白くない。

夜九時寢に入つた。

一月七日　午前八時頃起き出て、直に湯に行く。

心理學講義草稿をかく。

今日の新聞にはステスセルと乃木將軍と水師營に會見し（五日正午）胸襟を開いて懇談したといふ話がのつて居た。

文子來る。

一月八日、九日　〔略〕

一月十日　今日は金澤の諸學校連合にて午後五時より旅順陥落祝賀の大提灯行列を行ふといふ。余此の如き擧には不贊成なり。ゆかず。

學校より歸途大津氏を七聯隊に訪ふ。

清水の細君來る。
夜夏目氏の「吾輩は猫である、まだ名はない」を讀む。

山村へ寫眞を送る。
稻葉君より送れる三圓の小爲替を受取る。

一月十一日　今日昨日の提灯行列の爲學校休業なり。
入湯。
午前雪門和尙を訪ひ、茶と海苔とを呈す。
赤十字社支部に寄り初榮轉居の旨を通ず。
田部君を訪ふ。森內君來會、夕刻まで話す。

一月十二日　出校。
歸宅後プラトーのソフィストをよむ。
夜堀尾出來り話す。埋木の茶壺、弄物をもらふ。西鶴の永代藏を送る。
上山先生を訪ふ。

一月十三日　出校。
小川生がきた。明後日出京すといふ、同生を(に)鮮の子を托して藤岡君へ送る。
大拙君よりきた手紙をよんだ。

一月十四日　出校。
ソフィストをよむ。
陸軍省へ向(け)初榮の轉居屆を出す。

一月十五日　午前倫理學講義の腹案を考ふ、ならず。
午後三竹君を訪ふ。禪の話をきゝて感慣する所あり。

一月十六日　出校。
歸宅後ステスセルが長崎にきた記事をのせたる朝日などよむ。
餅を食ふ。

一月十七日　出校。
歸途尾張町山田時計店にて近眼鏡を買ふた（一圓二十錢）
入湯。
プラトーの「ソフィスト」をよみ了る。
〔發信欄に〕大拙へプラトー全集のことを問合す。

一月十八日　出校。
歸途補充大隊に遇り奥泉大尉を訪ひ一時賜金の義につき陸軍省へ問合を依頼す。
妻ランプを買ひ來る。
心理學講義草稿を作る。

一月十九日　出校。
堅町にて書棚を二個注文す。代價壹個一圓廿錢

新小説に出でたる鏡花のわか紫をよむ、面白し。
ことみ料理會にゆく。

一月二十日　出校。入湯。
春雨の蜜月をよむ、あまり面白からず。
この日よりデカートの Grundlage der Philosophie をよみ始む。
本間光彌氏より茶棚を送り來る。

一月二十二日、〔略〕

一月二十三日　出校。テニスをなす、清水賢藏(?)も加はる。
夜村木君の宅に於て讀書會あり。
此日よりつゞいて後備聯隊出立す。敦賀より乘船すといふ。瀧大尉(マヽ)へ學校へ訣別に來る。
書棚なる。
廿一日の新聞に一時賜金の下賜ありといふ。

一月二十四日、二十五日　〔略〕

一月二十六日　出校。今日ノートを忘れゆき大に困却す。
憑次郎遺族轉居及憑次郎死亡の屆をなす。
書棚の代を拂ひ、小き書架を買ふ。
堀尾より浦島をかる。

一月二十七日　出校。縣廳に出頭供助金證書を受取る。
坪内逍遙の浦島をよむ、面白し。デカートをよむ。
初榮より一時賜金請求書等捺印し來る。
母は牧子と共に金石にゆく。

一月二十八日　出校。市役所より清水氏の盡力にて一時賜金の請求書をとつた。
午後一時より獨語教科書の會議があつて五時頃に終つた。
今夜時習寮に茶話會があつたが、通知がなかつた故ゆかなかつた。
浦島をよみ終つた。
デカートをよむ。

一月二十九日　雪ふる。終日いでず、午後堀尾生來る。
松村魁病死の通知來る。
打坐せんと思ひしがとかくうまくゆかず。

一月三十日、三十一日　〔略〕

二月一日　出校。謙の指定學校變更の願を出した。
鈴木大拙よりオープン、コートの雜誌二冊送り來る。
哲學雜誌來る。
河合辯護士を訪(ひ)へ謝禮として五圓を送る。
今日よりクノー、フィスセルのフィヒテを讀み始め

た。今日止めんと思ふて居た間食をまたなした。一日會に行く筈であつたが、やめにした。

二月二日　出校。愛國義會へ三圓寄附する約束をした。前田侯爵より慰問せられ香奠として五十圓送られた。今日多少心持よかつた。

二月三日　〔略〕

二月四日　午前在宅讀書。山田老父來る。牧子來る。午後三々塾にゆき、永井君來り弓を教ゆ。三々塾にて入湯、タツタ汁を食ふ。懲次郎寫眞十枚複寫を注文す。

二月五日　〔略〕

二月六日　出校。午後プラトーの會讀。夜讀書。田部、藤井、中俣とベルジユーム博覽會への出品を見る。夜眠る能はず。

二月七日　今日學校の雪中行軍であつたが少しく腹の工合がよくないので行かなかつた。フィヒテをよむ。夜打坐。雜誌、雜言、間食最有害。最大の勇氣は自己に打勝つにあり、最大の事業は自己の改良にあり、此の大事業は滿洲の經營にもまさるべし。余の事業は道と學。

二月八日　出校。昨日行軍にゆかなかつた屆をだせといふ事にて本間君と爭ふた。松本の事につき寄宿舍にゆき上田、富田二氏に會す。小原某に逢ひ前田家の禮狀を呈す。

二月九日　〔略〕

二月十日　出校。本日教員談話會ある筈なれども出席せず。村木の使來る。縣廳にて給助金三百圓受取り直に十二銀行に預く。

二月十一日　プラトーのガストマールをよむ。堀田、富永來訪。夜堀尾來る。大拙の方へ戰勝の繪端書をいだす。

二月十二日　入湯。多田生來る。フィヒテをよむ。三竹君を訪ふ。君大に策勵す。

二月十三日　出校。倫理の口頭試驗を試む。午後讀書會あり。

二月十四日、十五日、十六日　〔略〕

二月十七日　出校。綱島氏の宗教上の光耀を顯する文

をよみ感發する所あり。
午後七時頃公債到着。

二月十八日　〔略〕

二月十九日　入湯。午前高橋氏來る。
午後基督教青年會に於て演說をなす。

二月二十日　〔略〕

二月二十一日　出校。歸途大津氏を訪ふ。
夏目氏の（猫で御座る）の續篇をよむ。

二月二十二日　〔前略〕フィヒテのGrundlageを了る。

二月二十三日　〔略〕

二月二十四日　出校。本朝北國新聞に旅順歸還將校の話として盤龍山と望台との間に於て憑次郎遺體發見されたりとの記事あり。早速新聞社に聞き合すに門司新報の切拔なりといふ。
今日しかも憑次郎の忌日なり。

二月二十五日　出校。校長より水野、寒河江の事につき話あり、又學生が宗教談を嫌ふ如き言あり。愚物は致方なき者なり。
歸途補充大隊に立寄る。
夜三々塾の會あり、來會者田部、富永、三竹、上原。

二月二十六日、二十七日　〔略〕

二月二十八日　出校。
心理の原稿を作る。
モナドロギーをよむ。

三月一日　出校。歸途大津氏を補充大隊に訪ふ。山根氏來り金と屆とを交換せんといふ。
午後水野、寒河江來る、之を戒む。增谷、高倉を伴ひ來る。宗教談をなす。
夜一日會にゆく、中野氏旅行の失敗談をなす。
門司新報より返事來る。

三月二日　出校。十二銀行より金を受取る。
森內氏の宅にて佛語をよむ。
此日太陽の綱島氏の文をよむ。深く感んず。
森內君よりウインデルバンドをかる。
吾人講學、修心の樂あり、又何を求めん。

三月三日　〔略〕

三月四日　出校。入浴。
憑次郎に關する記事の修正をなす。

三月七日　出校。五十圓吉崎へ送る。百五十圓銀行に預ける。三十圓利子として姉に渡す。二十圓かる。
山田より送れる片山の遺物をとりにやりしも渡さず。

三月八日　出校。今日ひどく高橋といふ生徒を叱した。

夜大津氏を訪ふ、不在、島田へゆきしといふ。シヤツを送る。

三月九日　出校。大津氏より入籍屆及受領證送り來る。此日天氣快晴、テニスをなしそれより田部、森内二君と才水の下流を散歩す。夜奥村氏に向け入籍屆を送る。

三月十日　出校。今日も天氣よし。奉天附近の戰況益々有望なるが如し。午後富永牧師來り話す。吉崎より證文を返し來る。市役所より使來る。

今日より朝日をとる。

三月十一日　出校。市役所にゆく。夜獨法三年の級會に招かれ奇觀亭にゆく。

奉天撫順占領、クロパトキン包圍せらる。

三月十二日　入浴。石川君來り刀劍を拭ふ。山村來る。

三月十三日、十四日　〔略〕

三月十五日　出校。午後手紙をかく。

峯岸四郎（後備五十聯隊第七十隊軍曹）に宛て憑次郎遺骨を送られんことを依頼す。

三月十六日　出校。歸途大津氏を訪ふ。第九師團死傷多く杉谷、山崎、田中等皆戰歿せりといふ。大津眼鏡をゆづりくれといふ。村木君の宅に於て佛語をよむ。今日は雨にて Lantern unarch できず。堀尾來り鐵嶺占領せられたりといふ。

三月十七日　〔略〕

三月十八日　天氣よし。今日は昨日の提灯行列にて學校休なり。プラトーのフエードーを讀み始む。

三月十九日　今日實に好天氣なり。兼て三竹君と約せし如く、同君と共に憑次郎の墓に詣でつ。去年渠が出立の前、同君と共に渠を訪ふて快談せし時を思ひ出で感慨に堪えず。

三月二十日　出校。開原占領の號外出づ。

三月二十一日　終日在宅。

三月二十二日　出校。歸途市役所に寄る、過日の屆は無效なりと云ふ。直に島田へ手紙を出す。岡井氏に托して姚刻三韻十八冊を三宅氏に送る。

三月二十三日　出校。第二學期了る。午後三時より村木、森内二君來り「アタラ」をよむ。

奥田賴太郎氏學校に來り宇野君の事を話す。

三月二十四日　本日休なり。午後學校にゆき試驗問題をかく。後テニスをなす。

熊谷來り後備五十聯隊長龜岡氏が愚次郎の遺骸を葬りたりとの兄よりの手紙を示す。早速龜岡氏へ手紙を出す。

大拙より舍弟を弔ふ Sonnet を送り來る。

入浴。

三月二十五日　出校。今日より試業始まる。午後テニス。

大拙に送る爲に佛陀論を求む。夜中俱氏を訪ふ。

三月二十七日　出校。學校より直に若林氏の葬禮に趣く。それより永井君と共に楠氏方弓場に行く。歸途河合に寄る。

三月二十八日　休。午後永井君を伴ひ楠氏方弓場にゆく。

小川政成氏來る。

三月二十九日　〔略〕

三月三十日　出校。一部二年の試驗。歸途露國の捕虜を見る。

奥村勇作來る。夜時國來る。

三月三十一日　出校。本日にて試驗了る。

午後宇都宮書店にゆき三月まで精算をなす。佛陀倫と孔子研究とを交換す。此の金をも拂ふ。

得能來る。大田里の件を托す。夜堀尾來り宿す。

四月一日　今日より學校休なり。奥村へ後見の書類を送る。熊谷へ手紙を出す。

夜洗心庵に入る。

四月三日　午後石川君を訪ふ。夜石川君來る。打坐二時間。

四月四日　午前市役所にゆく、屆書未だ來らずといふ、家に歸る。

奥村より手紙來る。午後又市役所にゆき種々話し漸く受理せらるゝ事となる。

此日より謙は附屬小學校に、外彦は幼稚園に入る。

午後四時頃又洗心庵に歸る。

散髮。

三竹君來る。石川君來る。打坐二時間。

四月五日　〔略〕

四月六日　午前歸宅。大拙へ孔子研究を送る。其外點調べをなす。

大津は中旬頃出征すといふ。

四月七日、八日　〔略〕

四月九日　午後高岩寺にて見性宗般和尚に逢ふ。軍治來る。午前大津氏を小鍛冶に訪ふ。

四月十日　出校。午後道友會を開き宗般和尚の降魔表の講義をきく。夜三々塾の會に趣く。

四月十一日　出校。午後石川君來り共に高岩寺を訪ふ。夜歸山氏方にて宗般老師の心經の提唱をきく。歸途三竹、石川二君と公園を散歩す。

四月十二日　出校。午前森内、藤井、水葉三君と公園にゆき櫻花を見る。捕虜の狀況憐むべき者あるを見る。午後宇野君來る。

四月十三日　出校。テニス。

四月十四日　出校。夜歸山方につき宗般老師の提唱をきく。奥村へ手紙を出す。

四月十五日　〔略〕

四月十六日　午前奥村來る。午後三竹君と共に宗般老師及俊岳和尚を招く。峨山及び鐵舟居士につき面白き話あり。

四月十七日　出校。午後岸夫妻來る。亞米利加より歸國後始めて來りし也。

高橋來る。プラトンの國家論をよみ始む。

四月十八日　〔略〕

四月十九日　出校。河北より謄本到着。直に兵籍訂正願を出す。

四月二十日——二十二日　〔略〕

四月二十三日　此日大野にてボートレースあり。謙、堀尾と共にボートにゆく。正午頃少しく雨ふりたれども直に晴れたり。

四月二十四日——二十七日　〔略〕

四月二十八日　出校。プラトーの國家論の大要を讀み了る。

四月二十九日——五月四日　〔略〕

五月五日　出校。午後教官會議あり。今日は精神壯快なり。ドイッセンの哲學史をよむ、面白し。

五月六日　出校。夜三々塾にて會あり、天才論など出づ。會す者三竹、茨木、上原君等。風ふく。

五月七日　今日はテニス大會を催す筈なりしが雨天にてできず。

五月八日　〔略〕

五月九日　出校。清澤氏の信仰座談をよむ。

五月十日　〔略〕

五月十一日　出校。島田愛信へ催促の手紙を出す。今日一日ワーグネルの話の準備に費す。

五月十二日　出校。午後ワーグネルを演ず。夜近軍博士の禪宗論を讀む。堀尾來る。夜月清し。

五月十三日　出校。午後讀書。天氣よし。特に夕頃學校の後庭の長閑な有様、言ひつくし難し。夜時習寮の茶話會にゆく。

五月十四日　入湯。今日テニスの大會あり。

五月十五日、十六日　〔略〕

五月十七日　出校。午後四時九分憑次郎遺骨到着、一家あげて之を停車場に迎ふ。〔後略〕

五月十八日——二十二日　〔略〕

五月二十三日　今日は學校に行軍あり、ゆかず。憑次郎の法名誤つて燒ける。東本願寺より二相院憑敎、西より——院確力。

五月二十四日　〔略〕

五月二十五日　出校。今日午後船井某催眠術の實驗をなす。

五月二十六日——二十八日　〔略〕

五月二十九日　出校。午後大學へ入學する方法につき學科長會議あり。生橋來る。此日對馬海峽に於て海軍大戰爭の結果、露艦十三隻沈沒、六隻捕獲、捕虜海軍少將ネボカトノフ以下二千名、敵全艦隊殆んど全滅せりとの公報出づ。

五月三十日　出校。ロゼストウェンスキー中將（司令長官）捕虜となりたりとの報至る。

五月三十一日　出校。東郷大將の詳〔し〕き公報の續出づ。實に意想外の大勝なり。國民歡喜措く所を知らず。やよひ、謙、外、附屬よりして海軍大勝を祝する爲〔め〕負傷者を見舞ふ。富山、三矢來る。梅原嚴實(?)氏來る。赤井牧來る。

六月一日——九日　〔略〕

六月十日　出校。午後ハンモックより落ち頭部を打つ。石川君送別の宴を催ふす。夜號外出づ。米國大統領ルーズベルト氏の仲裁にて

日露媾和の談判開けんとすといふ。
扶助料の願書に添ふべき謄本二葉を差出す。

六月十一日、十二日　〔略〕

六月十三日　出校。雨ふる、昨日より梅雨に入りたるなりといふ。新聞にて講和の批評喧し。桂、小村、兒玉が（もしくは伊藤が桂に代り）委員となり芝罘にて談判が開かるゝならんと傳ふ。

六月十四日——十七日　〔略〕

六月十八日　午前森内、村木兩君がきた。ユンケル氏の送別會を明後日六時より鍔甚に開くといふ。

六月十九日　今日頭の工合あしく終日睡る。夕に田部君を訪ふ。

六月二十日　本日より試驗始る。一部二年全體の心倫の試驗をなす。夜六時より鍔甚樓にてユンケル氏送別の宴を開く。藝者來り踊る。

六月二十一日　二部三年獨語試驗。
Bidschowsky の Goethe をよむ。

六月二十二日——二十四日　〔略〕

六月二十五日　午後石川君來り鐵舟居士の軸物を送らる。

六月二十六日——二十七日　〔略〕

六月二十八日　午前縣廳にゆき年金證書を受取る。學校にゆき書籍注文書を出す。
午後堀田、內田、熊谷、小川信次來る。
夕に石川君を訪ひ呻吟語を送る。

六月二十九日　〔略〕

六月三十日　午前打坐。

七月一日　吉田生來のベースボール費用請求書の捺印を求む。
山崎生來る。文科三年の爲に運動する也。
午前打坐。
午後石黑來る。次いで木曾淨專來り憑次郎靈前に讀經す。
夜山本嘉三郎來り書帳に何か書せんことを求む。余聖書の語を書して與ふ。

七月二日　〔略〕

七月三日　午前八時より第三年の及落判定會あり、午後に及ぶ。終つてテニス。
スペンサー傳をよみ感ずる所あり。余の如きも學者になれぬことはないと思ふ。
ゼームス氏が哲學研究に轉じたりときく。この人哲學を研究せば面白からんと信ず。

七月四日——六日　〔略〕

七月七日　昨夜眠る能はず。朝早く高橋二郎來る。堀尾歸る。

藤岡よりホトトギス送り來る。

夜森内君を訪ひ共に藤井君を訪ふ。

七月八日　〔略〕

七月九日　午前松平へ返事をなす。

月夜散歩、興味無限。

秋月片山より手紙來る。

七月十日　午前七時より十時まで入學試驗に手傳ふ。

コルサコフ占領の號外出づ。

七月十二日——十四日　〔略〕

七月十五日　午前逢坂來り信仰經歷談をなす。非常に面白し。基督教もこゝに至れば尙き宗教なり。

午後散髮。松井敬勝氏に逢ふ。宮地彦八郎氏を訪ふ。

ウィツテー露國談判委員に任命せられたりといふ。

七月十六日　午後三竹君を訪ふ。藤岡へ白隱禪師年譜を送る。

七月十七日、十八日　〔略、十七日夜洗心庵に入る〕

七月十九日　余は psychologist, sociologist にあらず life の研究者とならん。

禪は音樂なり、禪は美術なり、禪は運動なり。之の外に心の慰藉を求むべきなし。行住坐臥同樂手有何希。若し心子供の如く淸く純一となり得ば、天下の至樂之にすぎたるなし。non multa sed multum

七月二十日　午前冷拭、心を正して大に奮發せんとす。偶々宗より使來り大に困りしは女學校の講話なり。遂に諾した。嗚呼余の心の弱さよ。

夜に入りて奮心工夫、世事毫も心を煩〔は〕せず。外來の世事避けんと欲して避くべからず。これはこれ工夫は工夫とすれば可なり。眞の修行は實に此處にあり。

七月二十一日　入湯。どうも忍耐なし。

夜歸宅。講話の草稿を作る。

七月二十二日　〔略〕

七月二十三日　午前十時高等女學校にゆき講話をなす。

赤井牧來る。夕に河合辯護士を訪ふ。

七月二十四日　午前六時姉と共に出立。午前七時埴生村に着し太田芳人を訪ふ。容易に里に面會せしめず漸にして里に逢ひ金をかへす。歸途太田作平方に寄り之を話す。午後四時頃國泰寺（氷見郡太田村字西田）に着す。

夜始めて瑞雲老師に謁す。

七月二十五日　午前三時晨起。獨參二回。
午後提唱臨濟錄。
海水浴。

七月二十六日　夜新井（富山在新庄の人）といふ人來る。始め基督教に熱中し後禪に入りたりといふ。

七月二十七日　雨ふる。午後得能來訪。

七月二十八日　午後海水浴。海水清冽、四邊閑靜。

七月二十九日　午前大に打坐。午後學校より手紙、太田芳人なる者余に對し詐僞の訴をなせりといふ。直に歸途に上る。午後十時歸宅。

七月三十日　午前警察にゆく。午後兩保險會社にゆき吉村校長を訪ひ、學校にゆきテニス。
河合氏を訪ふ。十二銀行を訪ふ。

七月三十一日　〔略〕

八月一日　午前六時出立。途に不動町にて下車、太田作平を訪ふ。芳人なる者里を打ち追ひ出せりといふ。石動警察署長を訪ふ。
直に津幡に引き返す。直三を訪ひ共に七黑に行き里に逢ふ。久しぶりに伯母に逢ふ。興藏に逢ふ、七黑にて宿泊。生來始〔め〕てなり。

八月二日　朝大に雨ふる。
太田里へ四十圓及前の百圓に對する利子を返すことになし、直三氏差引なしとの證文を作り、直三氏と相携へて金澤に返り、十二銀行にゆき五十圓の定期預をなす。金は直三よりかる。
夕に山根を訪ふ、不在。三竹留守宅を訪ふ。
川村へ送金。

八月三日　午前直三氏五十圓を送る。南町郵便局にて書留。それにて落着。
學校にゆき校長に逢ふ。テニス。
午後中俣氏を訪ひ畫を見る。〔後略〕

八月四日　家にありて打坐。どうも家にありては眞面目になるを得ず、外魔に妨げらる。併しこれにてはダメなり。
午後森内君を訪ふ。夜打坐。

八月五日　打坐。

八月六日　打坐。午後安達欽靖來る。夜三竹君を訪ふ。未だ歸らずといふ。
靖國神社より戰死者の遺族に木盃及境内の闕を下賜せられたる旨、奥村より報じ來る。

八月七日　打坐。

八月八日　入湯。打坐。散髪。石黒文吉來る。

八月九日　此日より勉學を始む。午前學校にゆき書物をかる。

三好愛吉氏來り博物室にて逢ふ。午後石黒文吉來る。

八月十日　午後謙をつれて公園に散歩す。

八月十一日　午前宇野順藏來る。午後「倫一」を了る。オストワルトをよむ。夜奥村を山室に尋ねたれども出澤せず、上野寛一に逢ふ。

八月十二日　此日は倫理講義の「二」につき考いたが、（マヽ）よき考いです。

入湯。森岡京次郎より日華時報を送り來る。

八月十三日、十四日　〔略〕

八月十五日　午前學校にゆき書籍をかる。

嶋内銀行より二十圓引出す。午後森内君を訪ふ。

市村君ウルフレ氏の細胞論を送り來る。

誰か陸象山及三洲の方帖を持ち來る。

八月十六日　午前學校にゆき書をかる。午後高橋よりもらつた西瓜を食ふ。

八月十八日　午前稅務署にゆく。

今日思想混亂、大に不快なり。

夜十時頃母等河北より歸る。

八月十九日——二十一日　〔略〕

八月二十二日　昨日同樣一周忌にて多忙なり。入湯。

新聞を見る。媾和成立の見込あるが如し。

本樂寺住職來る。

八月二十三日　本日は憑次郎一周忌を營む。〔後略〕

今日又媾和の模樣面白からずとの電報あり、米國大統領周旋すといふ。

八月二十四日　〔略〕

八月二十五日　大に雨ふる。スピノーザをよむ。

八月二十六日　入湯。雨已まず。午前眠る。午後林叔父來る。

晩に散歩、中野嘉作氏に逢ふ、容顏枯槁一見哀を催す。

八月二十七日　〔略〕

八月二十八日　午前洗心庵にゆき、あし助とかいふ人あり。夜二三友人を訪ふ、皆不在。

媾和談判にて日本は大讓歩をなしたり、ダメ／＼。

八月二十九日　唯スピノーザをよむのみ。仲子來る。

御前會議の結果小村へ引揚の電報發せりとの號外出づ。

八月三十日　仲子越中へゆく。

昨日の號外は虚報なるが如し。夜媾和成立の號外來る。

八月三十一日　入湯。

媾和條件を見るに大屈辱なり。日本の元老閣徒何の顔ありて國民に對する。償金とれず樺太も半部ゆづり、鐵道も長春とはナサケナキことなり。吁々萬事休す。

午後高橋氏石工をつれて來る。

九月一日　〔略〕

九月二日　午前讀書。午後ウォールファートを訪ふ。

後藤といふ醫士の話に

朝六時晨起、午後一時半より五時まで勉學、五―六散歩、七―十まで勉學、十一時入寢、日曜は散歩。

九月三日、四日　〔略〕

九月五日　午前土師高等女學校長に逢ふ。

スピノザ讀了。

高岩寺和尚來訪。

午後船井といへる催眠術及心相學をなす人來る。謙、外彦を相す。

九月六日　午前外彦をつれ清水李平方にゆき齒の治療をなす。

母臂睡、〔こ〕れ注意すべき病氣なりといふ。

仲子歸る。

九月七日　午前八時より教官會議あり。午後讀書。暮に田部氏を訪ふ。

東京戒嚴令ひかるといふ。

午後清水氏初榮よりの書類を受取り來る。

九月八日――十四日　〔略〕

九月十五日　出校。權力說をよむ。

九月十六日　〔略〕

九月十八日　出校。午後森内君と共に小田切君を訪ふ。

夜眠る能はず。

ヘーゲル會讀を約す。

九月十九日、二十日　〔略〕

九月二十一日　出校。午後テニスをなし夕方に至る。

夜元良氏の文をよむ。眠る能はず。

九月二十二日、二十三日　〔略〕

九月二十四日　昨夜眠るを得ず大にくるしむ。午後森内、村木、小田切來る。

夜一部三年の級會にゆく。

九月二十五日――二十七日　〔略〕

九月二十八日　出校。夜歸山氏方を訪ひ、宗般禪師の

心經の提唱をきく。

九月二十九日　〔略〕

九月三十日　出校。天氣よし。松本氏を訪ひ弔ふ。文三郎不在。正午附屬小學校にゆき成績品をみる。二時より木の花幼稚園にて宗般禪師の提唱をきく。

十月一日　午前松本文三郎君來り、十年來始めて會したので甚樂しかつた。天氣よし。午後森內、村木、小田切君等と才川の下流を散歩す。暮に押野來る。

十月二日　出校。午後押野、高橋來り、うるさき話にて一日くらす。夜早く寢に入る。

十月三日　朝四時に起く、心快し。

十月四日　午前五時晨起、出校。柴宏來り卷煙草入をもらふ。三宅へ書籍送る（類篇七冊、才調集一冊）午後ゼームスをよむ。心理を之によりて講ぜんと思ふ。夜按摩を招く。

日記抄

字を見る。夜西町火事。

十月五日——八日　〔略〕

十月九日　出校。大拙サンフランシスコより端書を送る。來春まで留まるといふ。

十月十日　出校。天氣よし。午後高等女學校のテニスを見る。

十月十一日　〔略〕

十月十二日　出校。ことみ產氣を催す。やよひ、謙運動會あり。

十月十三日　〔略〕

十月十四日　出校。午後一時停車場に於て陸軍大將閑院宮殿下を奉迎す。夜三々塾の會あり。女兒出產。

十月十五日　午前小田切君方にて會讀。午後三竹君來訪。四時閑院宮殿下を送る。

十月十六日　〔略〕

十月十七日　午前入湯。藤井悌來る。九時よりテニス大會にゆく。

十月十八日　〔略〕

十月十九日　出校。午後師範學校のテニスを見る。藤岡より文學史を送り來る。堀尾より額面を送り來

る。
母河北にゆく。
十月二十日――二十七日　〔略〕
十月二十八日　出校。午後佛教青年會にゆく。佐藤、曉烏演說をなす。
十月二十九日　〔略〕
十月三十日　出校。Knowlson, How to study English Literature をよむ。
十月三十一日　〔略〕
十一月一日　天氣淸し。出校。
曉烏敏氏來る。
夜一日會にゆく。來會者吉村校長、久田校長外學生七八名。
セルリングをよみ、文を草す。
十一月二日　出校。午後田部君來り共に高等學校にゆきテニスを遊ぶ。
夜少しくセルリングをよみしのみ。
腦神經衰弱の書をよむ。
十一月三日　（天長節）午前七時半學校にて式あり。
此日幸に雨風なし。運動會盛んなり。午後四時頃學校にゆく。運動會終り運動場に篝をたき花火をあげ祝賀會を開く。六時頃歸宅。赤池氏の妻來る。
十一月四日　午前雨中にも關せず山科にゆく。教員談話會をひらく。余と茨木、河野と幹事なり。
十一月五日――十二日　〔略〕
十一月十三日　出校。三年休。射的にゆく。天氣よし。
此日大に考ふ。
高橋氏來る。
十一月十四日　出校。雨ふる。
昨夜眠るを得ず。あまりに考へたるなり。
十一月十五日、十六日　〔略〕
十一月十七日　天皇陛下內宮御參拜につき學校休業。
午後村木君と森內君を訪ふ。
十一月十八日　出校。午後小田切君を訪ふ。それよりベースボールを見る。
十一月十九日　午後小田切君の宅にて會讀。
十一月二十日、二十一日　〔略〕
十一月二十二日　出校。午後テニス。夜三々塾にて佐藤氏を招き話（旅順戰爭談）を聞く。
十一月二十三日――十二月十四日　〔略〕
十二月十五日　今日にて第一學期了る。出校。〔中略〕
Lombroso-Genie und Irrsinn をよむ。

十二月十六日　〔略〕

十二月十七日　午前石工と大乘寺山にゆく。基地を見る。

午後小田切方にて會讀。

十二月十八日――二十二日　〔略〕

十二月二十三日　出校。法事。

午後森内君を訪ふてヴインデルバンドを歸す。

十二月二十四日　午後小田切君を訪ひヘーゲルをよむ。

歸途三々塾に寄る。富永あり。

十二月二十五日　〔略〕

十二月二十六日　此日洗心庵に入る。

十二月二十九日、三十日　〔略〕

（後記、寸心先生日記抄は事情により此處で打切ることにする　西谷記）

前號目次

確實性（完）……文學士　長澤信壽
―聖アウグスティーヌス研究・その一―
ペスタロッチに於ける人間學的思想の發展……文學士　松田義哲
知の第二面（完）……文學士　山田次郎
―個性的自覺としての美―
寸心先生日記抄